

教師の新教育理念に対する 態度について

—— 差異的研究(その一) ——

野 村 昭

§ 1. 問 題

いわゆる「新教育」が日本に施行されて、既に、約十年の歳月を閲する。その間、制度上では、一応新しい教育体制が出来上りつつあるも、「新教育」に対する教師の態度には、必ずしも一様でないものがある。杜絶していた諸外国の教育理念が、一定の過程を踏まずに、一時にどつと紹介されたり、夫等と在来の教育勅語に基く教育の在り方との間に深溝を生じ、飛躍を求められたりした為に生じた理念の混乱錯綜や、現実の教育制度が、十全に生かされず、加え、新しい教育体制に順応する為の様々の仕事、対児童との関係、対父兄、対地域社会の問題等、更には之等理念と現状との間の齟齬等々、「新教育」に対する意見は幅蕪している。

我々はこの、「新教育」に対する教師の態度が奈辺に存在するかを方向づけ、位置づけて見ようと思う。これは教師の意識構造の在り方(1)や、教師のパーソナリティ(2)との関連に於ても論じられ、個々の教師についての考察を加えるべきであろうが、こゝでは、一般に教師が

- 1) 新教育理念・目標をどの様なものと考え、それを把握しているか。
- 2) それでは現在の教育の実情はどうか。そして、それと奉ずる理念・目標の間には、如何なる関連性が存在するか。その矛盾や齟齬はどうか。
- 3) それ等に対して、教師は、どんな意見を持ち、どうしようとしているか。

の三点について、与えられた項目を態度尺度法(3)(4)(5)(6)に依て、評価せしめ、その評価値を定位させ、各地域、性別、年齢層毎に尺度値の比較考究(7)に依て、殊に夫等の態度の差異性を見て行こうとした。

教育制度は、その目標、理念に応じて基準化され、方向づけられるものであるが、全時にそれは、固定化され、不変的な姿に於て捉えらるべきものではなく、その社会的背景、歴史的地理的条件に依る特殊性を認めるべきであろう(8)。かかる特殊性、他との差異性を求めるのが本研究の主目的である。

§ 2. 調 査

〔調査対象〕 本調査は島根県下のM市及びその周辺部、O郡一円、M町及びその周辺地域の三領域に於ける小、中、高校の教員を対象としている。その年齢、性別、人員構成は第1表の如くである。

別表

性別	男, 女	学校種	小・中・高	年令 ()才
----	------	-----	-------	---------

新教育理念について

◎ 新教育とは、どういうものだと思いますか。

+5	+4	+3	+2	+1	0	-1	-2	-3	-4	-5
絶	こ			ど			反			絶
対	れ			ち			す			反
だ	だ			ら			る			対
				よ						
← (ふさわしい)					→ (反している)					

1. しつけ、規律をきびしくする
2. 父兄とよく連絡をとる
3. 経験に基いて学習する
4. 教材を豊富に、設備を完備する
5. 地域教育を重んずる
6. 能力に応じて児童を指導する
7. 固定した考えで教育を進める
8. 教科書に基いて学習指導をする
9. 児童の幸福を目標とする
10. 義務教育を延長する
11. 道徳的教育をする
12. 男女共学を完全に実施する
13. 教師児童の区別なく、一体となつて学習する
14. 個性を尊重すること
15. 勤労精神を養う
16. 基礎学力を養う教育を実施する
17. 児童の自主性を育てる
18. 平和愛好の児童を育成する
19. 民主的教育を施す
20. 直接社会に役立つ人間を育てる

21. アメリカ式の教育をする
22. 子供を好きになること
23. 時々の問題に応じた生活学習をする
24. 教育技術に重点を置く
25. 学級の児童数を少なくする
26. 教員の質的向上をはかる
27. 子供自身の発表を促す
28. 広く浅い教育をする
29. 日本固有の精神で教育する
30. 六・三・三・四の制度を作る
31. 知的水準に重点をおかない
32. 児童の忍耐力を養う
33. 日本の新憲法の精神を具現する
34. 愛情をもつて児童に接する
35. 健康保持に心がける
36. 真理の探究を志す
37. 児童の素直さを養う
38. 人格(自、他共に)を尊重する
39. 多くの人に、平等な教育の機会を与える
40. 「記憶」より「理解」を深くする
41. 当用漢字・新かなづかいを施行する
42. 人格を陶冶する
43. 穏健な児童を育成する
44. 教育の独立をはかる
45. 責任感ある児童をつくる
46. 宗教教育を施す
47. 「理想」より「現実」を重んずる

第1表 調査対象

地域	年令性別		20 ~ 24		25 ~ 29		30 ~ 34		35 ~ 39		40 ~ 44		45 ~		計
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀			
M 市	7	13	14	4	4	2	2	3	0	1	0	0	50		
O 郡	4	10	13	16	4	9	2	2	5	0	2	0	67		
M 町	0	1	4	1	0	0	0	1	4	0	1	0	12		
計	11	24	31	21	8	11	4	6	9	1	3	0	129		

M市は、人口42,876 世帯数8,732 の県西部の小都市であり、O郡は、人口67,536,世帯数14,247を有する全郡殆んど山間に位する領域である。また、M町は、広島、山口両県と殆んど境を接する人口、3,711,世帯数847の小山間町である。(9)

〔調査日時〕 1954年8月

〔調査方法〕 先づ、O郡一帯の教員より

- 1) 新教育理念をどの様に考えているか。
- 2) 教育の現状はどの様であるか。
- 3) それ等の理念や現状に対して、具体的な事例と結びついた意見はどうか。

の三項目について、成可く具体的に、且つ簡略に箇条書にして、自由回答を集めた。それを無作為に配列せしめたのが別表である。

次で、之等の意見に対して、夫々、十一点尺度法(3)に依て、三地域の教員に評価せしめた。評価の際には「新教育理念」・「現状認識」・「自己意見」共に、夫々別表に附記した態度を教示に依つて要請し、分析に当つて、理念と現状との齟齬、及び意見と夫等との関連性を見出すことを可能ならしめる様にせむとした。

十一点尺度法は、元来主として態度測定法として発達し、その態度を標準化された尺度の上で位置づける為にとられて来た方法であるが、本研究では、各地域、性別、年齢別等の差異性を強調することを主眼とし、その地域間、性間、年齢層間の相対的意見の位置づけを行う為にこの方法を採用したのである。この方法は、各個人に接して意見提出の順序が相殺されることを期す為、カードに依つて評価せしむるのが最良であるが、人員と日数に制限され、止むを得ず別表の如き形式に依つたものであり、配列は無作為に行なつて、提示順序に依る効果を防がむとした。

※ 「現状認識」、「自己意見」の調査項目は次回に記載

§ 3. 調査結果

〔回答記入態度〕 回答は、調査者立合いの上で、用紙配布後、直ちに記入せしめ、その場に於て提出せしめたので、他者との意見交換に依る雷同性、意見修正等は或程度防げたと思われるが若干の、かゝる傾向がないではなかつた。また、項目が多岐に亘るため、不忠実な態度で記入するものも考えられるので、O郡に於て、同一項目を異つた場所に挿入して、その回答尺度値の信頼性を検してみたが、その相関は+0.8057で高く、また、その尺度絶対値は危険率5%水準で有意差は認められず、その態度に一貫性があるか否かは直ちに論ぜられぬが、必ずしも無判別な態度を持

第2表 調査の信頼性

年齢・性	第1回	第2回
20 } ♂	+2.8	+2.3
24 } ♀	+2.8	+3.0
25 } ♂	+2.1	+1.6
29 } ♀	+2.6	+1.7
30 } ♂	+1.5	+1.5
34 } ♀	+2.7	+2.4
35 } ♂	+3.5	+3.5
39 } ♀	+3.0	+3.0
40 } ♂	+2.4	+1.8
44 } ♂	+2.5	+3.0
45 } ♂	+2.5	+3.0
平均	+2.6	+2.4

Pr (F = 5.12 > F₀ = 2.57) > 0.05

しているのではないことが証された。その意見の浮動は第2表の如くである。

〔調査分析〕 この調査に於ては、小、中、高校の教師が、新教育を如何に考え、如何に対処し、その抱負や感懐はどうであるかの、全体的傾向を伺うこともさること乍ら、主眼はその差異性に着目することに置いた。従つて「理念把握」・「現状認識」・「意見」の各部門毎に、夫々、地域別、性別、年齢別に整理分析した。尙、本報告は、その第一報として、「新教育の理念把握」の差異性について述べる。

〔全体傾向〕 全調査者の平均尺度値に依て、各項目に置かれた全体的な力点の位置傾向を知ることが出来る。

(第3表) 第3表の尺度値は、各項の平均尺度値が集約的に(四捨五入に依て)示されたものであり、之等の尺度値は、その分散を異にし、夫等各理念項目に対する教師の態度には幅を有するのであるが、こゝでは、全体的な評価の流れを見るためにまとめた。これによれば次の様なことが考えられる。

第3表 全体傾向

尺度値	項目番号	項目数
+ 4	2. 5. 6. 9. 14. 17. 18. 19. 20. 34. 38. 39. 45	13
+ 3	3. 4. 11. 15. 16. 22. 25. 26. 27. 33. 35. 36. 37. 40. 42	15
+ 2	12. 13. 23. 32. 41. 43. 44	7
+ 1	1. 24. 30. 47	4
0	10. 31	2
- 1	8. 29. 46	3
- 2	21. 28	2
- 3	7	1

1) 課された各理念項目に対する評

価が、正の方向へ片寄つたこと——これは、本調査用紙作成の予備調査の際に、「新教育とは、どの様なものか」と云う正の方向の自由記述を求め、それをこの調査に於て評価せしめたことに由来すると思われる。

2) 各項目別に見れば、殆んど総花的に、正の尺度値が与えられているが、その評価の撒布度から見れば 17, 19, 38 項目に対しては、各地域、性別、年齢層を問わず、集中的に高い尺度値が与えられている。之等は、児童の自主性、人格尊重、そしてそれが民主教育であり新教育として最もふさわしいものとして取上げられているのである。(第1図、第2図、第6表参照) 之に反して、負の方向に評価せられたものを考えれば、宗教、日本精神、米国式等の何等かの特定の精神価値体系に寄かゝることをよしとせず、それは教育態度に於ても、教科書に準拠するよりも、寧ろ「生きた」形に於て、力動性を以て、指導を押し進めるところに、新しい教育の在り方を見出さんとしているのが示される。

〔地域差〕 M市、O郡、M町の三地区に於て、その教育理念把握の差異性を見る為に、各地域の平均尺度値に依て、その比較を試みた。各項目に対する夫々の平均尺度値の相対的位置は、第4表の如く極めて高い相関を示し、各項目に対する各地区教師の、評定傾向に、可成の一致度を見出すのであるが、その尺度絶対値には、若干の参差がある。(第1図)

1) M市のみが、他地区と異つた評価をしている項目

- a) 健康保持の教育 } 是認度大
- b) 理解さず教育 } 是認度大
- c) 知的水準に重点を置かぬ教育 } 反対度小
- d) 広く、浅い教育 } 反対度小
- e) 日本固有精神での教育 — 反対度大

第4表 地域間相関

	M 市	O 郡	M 町
M 市	×	+0.961	+0.918
O 郡		×	+0.904
M 町			×

2) O郡のみが、他地区と異つた評価をしている項目

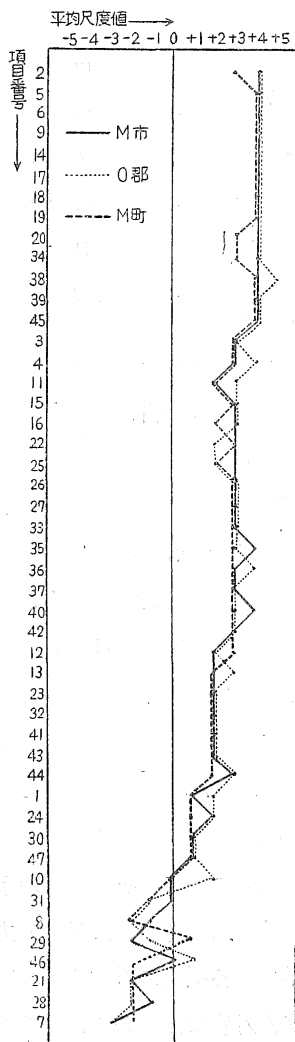
- a) 人格尊重の教育
- b) 教材、設備完備の教育
- c) 真理探究の教育
- d) 教師・児童の一体学習
- e) 躰・規律の教育
- f) 義務教育延長
- g) 宗教教育
- h) 道徳的教育
- i) 子供を好きになる教育 — 是認度小

是認度大

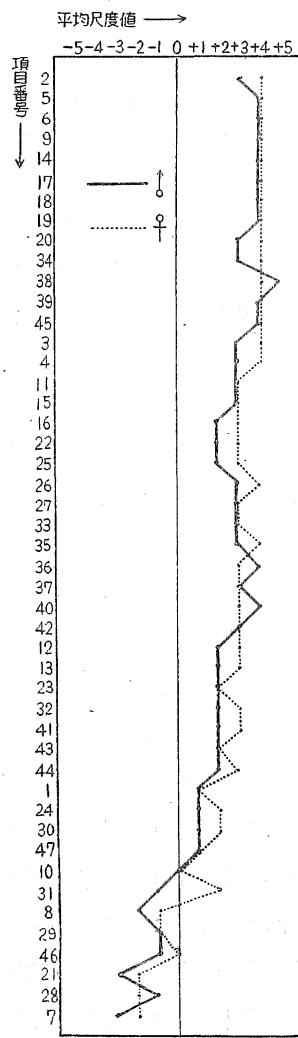
この中、殊に注目すべきは、義務教育に対するものと、宗教教育に於ける評価で、前者は、尺度値が殊に大きく、後者は、他の反対、又は無関係な態度を示すのに対して、是認の方向に傾いている。之等は、この地域の特殊性を物語るものであろうか。

3) M町のみが、他地区と異つた評価をしている項目

- a) 男女共学完全実施 } 是認度大
- b) 日本固有の精神での教育 } 是認度大
- c) 家庭連絡
- d) 直接社会に役立つ人間の養成
- e) 愛情に依る児童指導
- f) 基礎学力養成教育 } 是認度小
- g) 宗教教育 — 反対度大
- h) 固定した教育 — 小



第1図 地域別プロフィール



第2図 性別プロフィール

この中、日本の固有精神に依る教育に対するものと、O郡とは逆に、宗教教育に対する考え方には、この地方の傾向が伺えよう。

以上、三地域の夫々の特殊性を見ようとしたが、之を通覧するに、之等の尺度値の差が、その社会的風土に於て生じ来つたものであるか、或は、単に偶然の結果に過ぎぬかは早断出来ぬが、少くとも、尺度値の大差、及び正反その位置を異にしている項目については、注目する必要がある。

〔性差〕 性的な差異に依る評定の相対的位置づけは、相関+0.9475で極めて高い一致した傾向を示している。その、絶対尺度値を見れば、全般的に云つて、女教師の方が各項目に対する評価が正の方向に高い。(第2図) 従つて男教師の方が、評価点の高い項目を見れば、

- | | | |
|------------|-------|------|
| a) 人格尊重 | } | 是認度大 |
| b) 真理探究 | | |
| c) 理解の教育 | | |
| d) 広く、浅い教育 | ————— | 反対度小 |

で、女教師が男教師に比して高評価点を与えた項目、例えば

- a) 父兄との連絡をよくとる教育
- b) 教材や設備の完備した教育
- c) 愛情をもつて接する教育
- d) 教師・児童の一体学習

等々が比較的、教育技術面、具象的な事態との関連に於て、新教育理念を把握しているに對し男教師の側では、一種の生硬なスローガンにて、その理念を把持している処に、その考え方の差異性、特殊な傾向が見られよう。更に、「知的水準を重視するや否や」の項目に於ては、男教師は重視する立場をとり、女教師は、左程重視しない立場に立ち、それに対する力点の相違を示している。このことは、先述の、理念把握の在り方の差異と対照して、首肯され得る事象であろう。(第6表参照)

〔年令層別〕 我々がこゝで年令層別に新教育理念把握の様態を見むとしたのは、教職経験の長短に拘らず、自己の享けた、或は授けた戦前の教育、戦争中の教育、敗戦後の教育が、どの様に「新教育理念」評価に反映されるか、その時代的、社会的背景を摘出せんためである。年令を層化する場合、五年を群として一単位としたのは、よりその層が等質化されむことを望んだからであり、それに依て上記の目的をより詳細に見たい意図に出づるものである。

第5表に依れば、男教師の各年令層間の相対的な尺度値の位置づけは、夫々高い相関を有し、その年令層の全般的な傾向とし

第5表 年令間相関 (8)

	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44
25~29	0.959				
30~34	0.886	0.790			
35~39	0.859	0.897	0.799		
40~44	0.880	0.892	0.836	0.898	
45~	0.841	0.836	0.816	0.811	0.834

ては之迄の地域間、性間と全様一致していることを示している。その絶対尺度値に依て各項目に対する評価態度を位置づければ、そこには、尺度値の抜がりが見られ、教育理念把握に、すれが見出される。

之等を、男女別に夫々の年齢層に分け、その特殊性を分析して行こう。(第6表1,2) この場合、或年齢層が、他の層と異つた評価値を与えたもの、即ち、その層が他の層よりも或理念を重視、或は、軽視(反対)しているものに重点を置いて考察する。(第7表)

一般的傾向として、女教師の方が、男教師よりも評価点が高いことは、既に述べたところであるが、年齢的に見て行つた場合、必ずしも、それが直ちにそのままには首肯され得ない。男教師に於ては、評価点が、年齢の進むに従つて漸減する傾向を示し、女教師にあつては、寧ろその逆の、漸増する傾向を有している。(第8表) これは、各男女教師の新教育に対する構えを暗示するものであり、之等の理念を肯定的に受取るか否かの方向を示唆する。

第6表の1 年齢層別尺度値位置 (8)

項目番号	-5	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4	+5
2								□	○×V◎	△	
5									×△	○□V	◎
6										○×△□	◎
9									◎	V ○×△□	
14									□	×△V◎	○
17										○×△□	◎
18									◎	V ○□V	×△
19										○×△□	
20								V	×□	V◎ ○△◎	
34									×□V◎	○△	
38										△□	○×V◎
39										△	×□V ◎◎
45								V	□	○×△	◎
3							◎		×	○△□V	
4								◎	□V	○×△	
11								×□◎	△V	○	
15								V	×□	○△◎	
16								□V◎	○×△		
22								×△□V	○		
25								◎ ○×□V	△		
26								◎			
27							△	V	○□◎	×	
									○×△□ V◎		

33									x△□◎	OV
35								□◎	xV	○△
36									□◎	○x△V
37								△◎	○x□V	
40									△V	○x□◎
42								V	x△□	◎◎
12								○x△□	◎	
13					V		□	x△	◎◎	
23							△V	○x◎	□	
32					□			△V◎	○x	
41							xV	○△□	◎	
43							○x△	□◎	V	
44							□V	△◎	○x	
1							x□V◎	○△		
24							□V◎	○x△		
30				△	x		□V	◎◎		
47				◎	x□			△V	○	
10			◎	△	○x		□V			
31			□V	x	○△		◎			
8		V	x△◎	○□						
29			○□V	x			△◎			
46		□	◎	V	x		○△			
21	◎◎	△	Vx	□						
28			○x□	△V	◎					
7	V◎	□	○△	x						

(註) 20~24 ○ 25~29 x 30~34 △ 35~39 □ 40~44 V 45~ ◎

第6表の2 年齢層別尺度値位置 (♀)

項目番号	-5	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4	+5
2										○x△□	
5									○x	△□	
6									○	x△□	
9									○	x△	□
14										○x□	△
17										x△○□	
18									○□	△	x
19										○x△	□
20									○	□x△	

第7表 年令別項目比較

		♂ (項目番号)	項目数	♀ (項目番号)	項目数
20~24	(+)	14(+1) 11(+1) 22(+1) 47(+2)	4	12(0) 30(0)	2
	(-)		0	6(-1) 9(-1) 20(-1) 22(-1) 42(-1) 44(-2)	6
25~29	(+)	26(+1) 7(+1)	2	18(+1) 26(0) 36(+1) 42(+1) 32(0) 41(0) 47(+1) 8(+1)	8
	(-)		0	13(-1) 10(-1)	2
30~34	(+)	2(+1)	1	14(+1) 1(+1) 24(+1)	3
	(-)	39(-1) 26(-2) 30(-2)	3	45(-1) 12(-2) 8(-2) 29(-1) 7(-2)	5
35~39	(+)	23(+1) 21(+2)	2	9(+1) 19(+1) 38(+1) 16(+1) 46(+1)	5
	(-)	2(-1) 32(-2)	2	39(-1) 37(-1) 41(-2) 1(-1) 24(-2) 21(-1)	6
40~44	(+)	43(+1)	1		
	(-)	20(-1) 45(-2) 15(-1) 42(-1) 13(-2) 8(-1)	6		
45~	(+)	5(+1) 6(+1) 17(+1) 45(+1) 12(+1) 41(+1) 31(+2) 23(+1)	8		
	(-)	9(-1) 18(-1) 3(-2) 4(-1) 10(-2) 47(-2)	5		

(註) 1) (+)は他層より優位点 2) 項目の()内は、その平均値からの変異差
(-)は " 劣位点

第8表 各項目総尺度平均値

性 \ 年令	20 ~ 24	25 ~ 29	30 ~ 34	35 ~ 39	40 ~ 44	45 ~	Av
♂	+ 2.5	+ 2.2	+ 2.2	+ 1.8	+ 1.9	+ 2.1	+ 2.1
♀	+ 2.1	+ 2.5	+ 2.2	+ 2.2	+ 3.7		+ 2.5
Av	+ 2.3	+ 2.4	+ 2.2	+ 2.0	+ 2.8	+ 2.1	

(A) 男 教 師

1) 20~24——全般的に見れば、この年令層が最も之等の項目に対して肯定的である。

- a) 個性尊重
- b) 道徳的教育
- c) 子供を好きになる
- d) 「現実」重視

等は、他の世代の男教師に比して力点を置いている。殊に「理想」よりも「現実」に基いて教育を推進める態度を強く押出しているのと、之等の項目に、他の年令層よりも低い評価を与えているのが、平均的に云つて存在しないのは、この世代の社会的背景を考える場合、肯ける特徴である。と同時に、之は他面、その評価態度、即ち、自己の教育信条、経験等との関連に於て眺められるこの項目に対する甘さをも考慮しなければならぬ。

2) 25~29——この世代に於ても前年代と同様の年令層他の年令層に比してより否定的な項

目は見当らぬが20~24よりは多少、之等の理念に対して批判的である。

a) 教員の質的向上

b) 固定した考えで行う教育

に対しては、より肯定的ではあるが、後者は反対の度合が、相対的に少いと云われるのみで、殊更に取上げる、必要もなからう。(第6表1,第9表)而も、この項目は、内容が曖昧で、全般的に意見の拮がりも大きく、課題それ自体が適当とは考えられない。

3) 30~34——この年令層では、更に批判的になつて来ている。

a) 父兄との連絡を重視しているが相対的に云つて、それ程重要ではないと思われる。

b) 教育の機会指導

c) 教員の質的向上

d) 六三三四制の確立に対して、より否定的な立場をとるが、殊に教員の質的向上に関しては、25~29の年令層の間に、教員資質の問題、更には、社会的時代相の断絶が伺える。六三三四制に対して、この世代がより批判的であるのも、かゝる観点からして首肯されよう。(第10表)

4) 35~39 ——この世代は取立て、云うべき程の特異性は有していないと云えよう。

a) 即生活学習

b) 米国式教育

に対して他の世代よりも肯定的であり、

c) 父兄との連絡

d) 児童の忍耐力養成

には、否定的な傾向を有しているが、他世代に比して、概ね中庸を持していると考えられる。

5) 40~44——こゝでは、否定的な面が際立つてくる。

a) 穏健な児童を育成すること

を他よりも強調し、全時に、

b) 責任感ある児童養成

c) 教師・生徒の一体学習

を、他層よりも軽く評価しているのは、教師の指導性を、この年令層が新教育にも強く要望していることを示しているものと云えよう。また、

d) 直接社会に役立つ人間養成

に対して消極性を示しているのは、教師の指導性と対照して、学校教育の充実を目指すものと考えられるのではなからうか。しかし

e) 勤労精神

f) 人格陶冶

g) 教科書学習

に対しては、他層よりも否定的傾向を有して居り、理念、技術面共に、その教師の指導性が在

来の教育の在り方のまゝには、直ちに肯定し得ない現れと見る事が出来よう。

6) 45~ ——この層の特徴は、之等の項目に対する賛否両論の構えが極立っていることである。即ち、肯定するものは大きく肯定し、否定するものは、はつきりと否定する態度が見られることである。

- a) 知的水準に重点を置かぬ教育
- b) 能力別学習
- c) 地域的な学習
- d) 児童の自主性涵養
- e) 責任感ある児童養成
- f) 広く、浅い教育

等、知的な水準を重んぜず地域や能力に即した児童の自立性を重んじた教育等に他層より、賛同しているが、

- g) 平和愛好の教育
- h) 児童幸福の教育

等、内容の意味するものが、多岐に亘るものに対しては、消極的であり、

- i) 義務教育延長

の、制度上の問題には、殊に他の層が賛同の方向をとっているのに対し、否定の方向を示しているのは注目される。

- j) 経験に基づく学習

- k) 「理想」より「現実」を重んずる教育

に対しても、他年齢層より消極性を示しているが、之は、肯定的な児童の自主性を重んずる教育地域、能力に応じた教育等の、即児童教育技術が、経験や現実のみを根幹とするのでないことを物語るものと考えられる。殊に、現実を重んずる教育に対する否定傾向は、他層が賛同の方向をとるのに対し、この年代層の理想性を示すものとして更には、

- l) 日本固有の精神保持

に対して肯定的立場をより強調し、

- m) 米国式教育

に反対する立場をより強く打出しているのは、この年代層の、精神価値体系を暗示するものとして刮目されよう。(第9表)

第9表 否定の方向を有する項目尺度値 (年令別)

番号	項目	性	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45 ~	男 平均尺度	女 平均尺度	全 体 平均尺度値
7	固定した教育	♂	-3.0	-2.4	-2.8	-4.3	-4.8	-4.5	-2.6		-2.8
		♀	-1.1	-1.1	-3.5	-3.2	-3.0		-2.4		
8	教科書学習	♂	-0.7	-1.7	-2.1	-0.8	-2.5	-2.0	-1.6		-1.4
		♀	-1.5	+0.3	-2.6	-1.8	+3.0		-0.5		
10	義務教育延長	♂	+0.2	+0.2	-0.9	+0.5	+1.0	-1.5	-0.1		0
		♀	-0.1	-0.6	+1.2	+1.3	0		+0.4		
21	米国式教育	♂	-3.5	-2.8	-3.3	-1.0	-1.8	-3.8	-2.7		-2.3
		♀	-1.7	-1.5	-1.7	-2.6	-3.0		-2.1		
28	広く浅い教育	♂	-1.6	-1.7	-1.3	-1.8	-0.9	+0.3	-0.7		-1.6
		♀	-1.3	-2.1	-0.8	-1.9	-2.0		-1.6		
29	日本固有精神 保 持	♂	-2.2	-0.9	+0.5	-2.0	-1.6	+1.0	-0.9		-0.7
		♀	-0.1	-1.1	-2.1	-0.3	-3.0		-1.3		
31	知的水準に重 点を置かぬ	♂	-0.3	-0.8	+0.4	-1.8	-2.0	+1.0	-0.6		-0.4
		♀	+0.4	-0.9	+0.1	-1.2	+5.0		+1.6		
46	宗 教 教 育	♂	+1.2	-0.1	+1.3	-3.3	-0.7	-1.8	-0.6		-0.5
		♀	-0.5	-0.7	-1.1	+1.2	+3.0		+0.4		
47	「理想」より 「現実」	♂	+2.5	+0.3	+1.7	+0.3	+1.5	-0.5	+1.0		+0.9
		♀	+0.3	+1.9	+0.2	+1.3	+2.0		+1.1		

(B) 女 教 師

女教師の各年代層別の評価を観ずる場合、40~44年令層と、調査対象が1名であり、その尺度値が、他層と比較する時、余りにも不均衡に各項に対して高点が与えられ過ぎている為(第6表の②)比較考察の対象から除外した。

1) 20~24 ---この年令層は、女教師の中最も之等の項目に対して否定的である。

- a) 男女共学完全実施
- b) 六三三四制確立

の制度的な問題に対して、他層よりも積極性を示しているが、

- c) 直接社会に役立つ人間養成

d) 子供を好きになる

e) 教育の独立

f) 人格陶冶教育

などでは、女教師の全体的傾向よりも低い評価をし、殊に、「子供を好きになる」ことに対する評価は低く、之は寧ろ男教師の傾向に一致している。(第6表の1,2) 其他

g) 能力別学習

h) 児童の幸福を目指す

ことなどに、他層より否定の傾向が見えるが相対的に云つてそれ程、重視すべきものでもない様に思われる。

2) 25~29——この年代は、前世代とは逆に、之等の項目に対して、最も肯定的である。殊に

a) 教員の質的向上

に対して、男教師の25~29年令層の場合と全様に、積極的な賛意を示しているのは、20代と30代の間にも男女共に教育資質一つの断層が横たわることを物語るものと云えよう。(第10表)

b) 平和愛好児童の育成

c) 真理探究

d) 人格陶冶

等の、教育を抽象的な形で把握している態度は、寧ろ男教師の全般的傾向に類似して居る。また

e) 教科書中心学習

に対しては、他層と方向を異にして、肯定の方向をとり、

f) 義務教育延長

に、20~24の世代と共に否定の傾向を持つているのも、次の30~34年令層と比して、区割される特異性である。

3) 30~34——この年代は、之等の項目に対して、他層との比較の上では批判的であるが、

a) 個性尊重

b) 躰、規律をきびしくする

等、自主と規律との問題、更にはそれにまつわる教育技術に重点を置き、

c) 固定した考えでの教育

d) 教科書中心学習

e) 日本固有の精神での教育

などには、大きく反対して居り、20代とは異つた新教育理念が形成されつつある様に思われる。

4) 35~39——この世代での特徴は男教師の45~の年代と全様、賛否の態度が判然としている点である。

a) 基礎労力の養成

b) 宗教教育の必要

を強調し、

- c) 教育技術
 d) 米国式教育
 e) 当用漢字や新かなづかい

に消極性を示すのは、この世代の社会的な背景をも示す明確な特徴であろう。特に、宗教教育に対する要請は、他層が、それに反対する立場をとるに比して、大きい。

第10表 意見の擴がりの大きい項目尺度値 (年令別)

番号	項目	性	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45 ~	男女平均値	全 平均尺度値
3	経験に基く学 習	♂	+3.3	+2.7	+4.0	+4.3	+3.7	+1.3	+3.2	+3.1
		♀	+2.6	+3.0	+3.4	+3.3	+5.0		+3.5	
13	教師児童の一 体学習	♂	+2.8	+2.1	+1.7	+1.3	+0.1	+2.5	+1.8	+2.2
		♀	+3.4	+1.9	+2.7	+2.8	+3.0		+2.8	
24	教育技術に重 点	♂	+1.7	+1.5	+1.6	+1.3	+0.6	+1.0	+1.3	+1.4
		♀	+1.6	+2.0	+2.6	+0.3	+3.0		+1.9	
26	教員の質的向 上	♂	+3.2	+3.7	+1.4	+2.5	+1.9	+2.8	+2.6	+3.1
		♀	+3.4	+4.2	+3.3	+3.4	+5.0		+3.9	
30	六・三・三・ 四制実施	♂	+2.2	+0.2	-0.7	+0.7	+1.1	+1.8	+0.9	+1.0
		♀	+1.5	+0.6	+0.5	+1.1	+5.0		+1.7	
32	児童の忍耐力 養成	♂	+3.1	+2.6	+2.2	+0.3	+2.2	+1.5	+2.0	+2.2
		♀	+1.8	+2.7	+1.8	+2.3	+5.0		+2.7	
45	責任感ある児 童育成	♂	+3.9	+4.0	+3.9	+3.3	+2.4	+4.5	+3.7	+3.7
		♀	+3.8	+3.5	+3.4	+3.9	+5.0		+3.9	

(註) 以上の他第9表の諸項も、同様の拡がりを示す

§ 4. 要 約 及 び 考 察

以上の結果を綜合要約して見るに、全般的に云つて、次の様な傾向が伺える。

1) その教育観を見れば男教師にあつては、教育目標の把握が理念的思想的であり、之等肯定の方向に片寄つた各理念項目に対して、年令が増加するに従い、批判的になるのに対し、女教師は、その考え方が現実的具象的で、之等の新教育目標として考えられている諸項目に対し、年令が進むにつれて肯定的な傾向がある。

2) 年代層から見れば、殊に、教員資質に関する問題では、20代教師と30代教師の間に、男

女共に一つの断層が横たわり、戦争をはさんだ二つの世代の在り方を示すものと云えようか。また、之は、自省に依て「もつと求めるべきだ」と考える世代と、「それ程やかましく云う程のこともない」と思う世代との、教育に対する自負と構えの度合とを語る一つの姿の様にも思われる。

3) 男女共に高年令層では、教育目標に対する賛否の態度が判然として居り、「いいものはいい」、「わるいものはわるい」式の教育信念とも称すべき態度が他層に比して、より形成せられているのが観ぜられる。

4) 地域に於ける差異には、注目すべきものは余りなかつたと云わねばならぬ。山間の小山村であるM町では、他が反対傾向を有するに比して、日本固有精神での教育を要請しているのが注目されるが、之も、M町が他地区に較べて、被調査者に高年令層の教師が占める比重が大きい(M市では20代と30以上の年令層の比率は約2:1、O郡では3:1に対して、M町では1:1)のために生じた結果と考えられ、この問題は寧ろ年令層の問題に帰すことの方が妥当の様に思われる。

5) 全体の傾向として、児童の自主性、人格尊重、民主的教育を施すことに、新教育理念の中核を認めている。

以上、地域、性、年令層等に依て、どの様に新教育理念の把握が異つているかの傾向を見て来たが、之は同時に現今の教育の「現状」や教育に対する「意見」との関連に於て論を進めるべきであり、差異性は、「現状」や「意見」に寧ろより多く希せられるものでありそれを俟つて始めて、目標理念把握の特殊性も浮彫りにせらるべきものであらうと考えられる。

〈文 献〉

1. 日本教職員組合編：教師の職場生活とその障害、「日本の教育」——第2回教研大会報告——，昭28. 岩波書店
2. 坂本一郎：教師のパーソナリティとその適応，「田中寛一博士古稀記念論文集：教育心理の諸問題」，昭27. 日本文化科学社
3. L. L. Thurstone & E. J. Chave : The Measurement of Attitudes, A Psycho-physical Method and some Experiments with a Scale for measuring Attitude Toward the Church. Univ of Chicago Press. 1929
4. 古賀行義：社会態度、与論調査，「現代心理学第二巻，社会心理学」昭18.
5. 島田一男：社会態度，心理学講座 Vol 10 III, 1953.
6. G. A. Lundberg : Social Research : A study in Methods of Gathering Date. Green & Co. 1942 (福武直・安田三郎訳：社会調査)
7. 大浦 猛：比較教育法，心理学講座 Vol 5 VII, 1954.
8. 続 有恒：進学適性検査，心理学講座 Vol 9 III 2, 1953.
9. 島根県：島根県統計書 昭29.